

國學院大學學術情報リポジトリ

〔談話室〕 歴史史料の可能性

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 國學院大學 公開日: 2024-05-21 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 岩橋, 清美, Iwahashi, Kiyomi メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002000390

歴史史料の可能性

岩橋清美

二〇二三年十二月一日夜、北海道の各地でオーロラが観測された。同地でオーロラが見えたのは二十年ぶりということもあり、インターネットには薄赤い光がほんやりと広がる夜空の写真や動画がアップされ、天文好きの間ではちょっとした話題になった。

通常、日本のような緯度の低い地域でオーロラが観測されることはほとんどない。オーロラは太陽活動を起原とする現象である。太陽活動の活発化によって地磁気嵐が起きると、低緯度オーロラの発生だけではなく、地上の送電網に大電流が流れて大規模停電や、人工衛星の故障等が生じる。このため、近年、宇宙天気災害の研究が進められつつあり、歴史的オーロラ研究もその一部分である。

この研究は、歴史史料からオーロラ発生の記述を蓄積して、一〇〇年から一〇〇〇年スケールの太陽活動を再現し、宇宙天気災害がどこまで巨大に成りうるかを分析するもので、人工衛星等のインフラの維持といった面で社会的意義は大きい。研究の難しさは歴史史料を使いながらも、歴史学的な史料解釈だけでは研究できないところにある。つまり、歴史史料を宇宙科学の方法論で読み解けるかどうかが鍵になってくるのである。

この研究に関わることになった筆者は、江戸時代の古文書を宇宙科学や天文学の研究者と読み解いていった。分析においては、まず、「赤気」「白気」といったオーロラを示す可能性がある語彙を手掛かりにオーロラ記述を探すことから始まる。手法は二つあり、既に確定しているオーロラ発生年月日をもとに探し出す方法と、長期にわたる日記史料の悉皆調査である。「赤気」や「白気」という語彙は月暈や彗星を示すことがあるため、これらと区別するために異なる

二つの地域の記述が必要で、より精度を上げるためには、中国・欧州といった距離の離れた記述が好ましく、西洋史や東洋史の研究者の協力も必要になる。こうして確定した史料をもとに、観測地の磁気緯度を求め、色・広がり・明るさ・位置・光の時間的変化といった情報を集約し、個々のオーロラの全体像を明らかにし、それを積み重ねていくことで一〇〇年、一〇〇〇年の太陽活動を再現するのである。

歴史史料からオーロラの規模を明らかにするには、理系の研究方法によるところが大きいのだが、この分析を続けていくなかで近世人のオーロラ認識を再考するに至ったことは収穫であった。明和七年（一七七〇）七月二八日のオーロラを記した史料に、柳原紀光の日記「愚紳」と彼が編纂した歴史書「続史愚抄」があるが、これらの史料のオーロラ表現の微妙な差異が意味するところに気づいたのもその一つである。二つの史料はともにオーロラの光に注目しているが、紀光は「続史愚抄」編纂時に光の明るさをよりの確に示すために表現に工夫を加えており、そこに彼のオーロラ認識をみるることができる。

理系との協働においてポイントになるのは、確度と精度の高い情報を史料から見つけ出すことにある。この作業を通じて、史料中の微妙な表現の意味するところを明らかにできたことは収穫だった。歴史研究者は史料を通して、「近世人はオーロラをどのように認識していたのか」、あるいは、「なぜそのように認識したのだろうか」という問いをたてる。その問いに実証的に取り組むためにはオーロラ現象のメカニズムを知る必要がある。そこに文理協働の意義を見出すことができる。歴史学の実証主義と宇宙科学の科学分析が互いに補完し合う循環的な研究なのである。

しかし、文理の研究者が協働することは楽しいことばかりではない。研究スタイルを含め様々な場面で相互理解が必要となる。とくに研究成果の発信である論文執筆において、複数著者による執筆が一般的である理系論文の手法は歴史学にはなじまない。一方で、近年の大規模災害や自然環境の問題を考えるとき、他分野の研究者との協業が歴史研究に必要なことは、もはや自明の理である。

（日本近世史／文化史、地域史）